

テレビドラマ代表作選集

芸術祭版

日本放送作家組合
〈発売元〉白石書店

テレビドラマ代表作選集 芸術祭版

1979年3月20日 第1刷発行©

編集 協同組合 日本放送作家組合

発行人 大林 清

発行所 協同組合 日本放送作家組合

106千 東京都港区六本木6-2-5 ハラビル1F

電話 03 (404) 6761

発売元 株式会社 白石書店

千101 東京都千代田区神田神保町1-28

電話 03 (291) 7601

1074-0049-3355

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

文栄印刷・橋本製本

刊行によせて

文化庁長官 犬 丸 直

このたび『テレビドラマ代表作選集』の一卷として、芸術祭の受賞作品脚本集が編まれ、日本放送作家組合から刊行される運びとなりました。まことに御同慶にたえないところであります。

芸術祭は、昭和二十一年にはじまり、いまや我が国芸術の代表的な祭典として、定着しております。この芸術祭に放送の分野が参加したのは昭和二十三年からで、すでに三十年余の長い歳月が経過しております。この間に昭和二十九年からはテレビジョンの部門が加わり、さらにこの部門はドラマの部とドキュメンタリーの部に分かれて現在に至るなど、芸術祭各分野のなかでも特にはなやかな発展を示してきたものであります。

『芸術祭三十年史』をひもときますと、この間にラジオ、テレビの優れたドラマが数多く創作、発表されてきたことが判然とし、同時にそれらの作品からは、その時どきの人間の生き方や時代思潮のうねりさえ感じられて深い感動にとらわれます。

ここにこれらの名作テレビドラマの脚本が集成されますことは、単に過去の放送文化の資料が記録保存される意義ばかりでなく、もつと積極的に、将来のテレビドラマ創作に大きな効果をもたらすことが期待されます。この意味からも本書の公刊は時宜を得たものであり、また、このために御尽力を惜しまれなかった御関係各位に深く敬意を表するものであります。

序 文

協同組合 日本放送作家組合 理事長 大林 清

あれは日本にテレビ放送が開始されるちょっと前だったから、昭和二十七年頃のことだったと思うが、或る時、日本民間芸術連盟といったような、それまであまり聞いたことのない名の団体から招集がかかって、歌舞伎座別館の何階かにあるその事務所へ行ったことがあった。

集まった。顔ぶれを見ると、ほとんどが私の知らない人たちで、中にたしかまだ面識のなかった内村直也氏の顔もあった。

会合の趣旨はどうやら近く日本でもはじまるテレビジョンについての、説明か研究のようなものだったが、それについてアメリカ本の翻訳テキストなどを配布された記憶がある。

やがて準備されたスクリーンに映写されたのは、アメリカのテレビに用いられているというコマ―シャルのフィルムだった。

テレビドラマの脚本についても、何か説明があったようだが、それはその時であったか、別の機会別の場所であったか記憶が確かでない。

要するにその会合は、私たちにテレビ制作の知識を植えつけようとする講習のようなものであったらしい。

その時の同席者で私以外の人々は、もった的確に目的と内容を知って出席したにちがいないし、今でも鮮明な記憶を持っていることと思うが、私は暗闇から引き出された牛のようなもので、その後何回その会合に出たかも憶えていない。

ただテレビジョンとは大変メカニズムの複雑な媒体で、私にはとてもテレビドラマなど書けそうもないと思ったのは事実である。

それからしばらくして、私たちを招集したその組織が、日本ではじめてテレビ局として開局した日本テレビに組み入れられたという話を聞いた。確認していないので真偽のほどはわからないが、それが日本のテレビ放送胎動期に或る役割を果たした団体であったことはまちがいない筈である。

テレビ先進国のアメリカの資料を取り寄せて、眼の不自由な人が手探りで歩きはじめたような初期を思うと、その後僅々三十年に充たない間に、テレビが今日の進歩と繁栄を来したのは、日本だけでなく世界を見廻して、まことに瞠目に価いする。

テレビ初期のきびしい制約の中でも、ドラマは生れ育った。その時期々々のメカニズムに歩調を合わせて、しかもそれを最大限に利用して、多くのすぐれたドラマが創り出された。

ビデオテープが開発され、ナマ放送から解放されてからは、ドラマは一段と生気を運び、その編集が自由になると、それまでのあらゆる束縛から脱して、制作の条件は映画とえらぶところがなくなつた。

ドラマの質的向上も、平均的にはたしかにそれに歩調を合わせて来ているといえるだろう。

ただ、ラジオにせよテレビにせよ、放送ドラマを書く作家にとって何よりも痛痕事は、心魂をこめた作品も、一瞬にして空中に四散し、あとに何も残らないことである。

なるほど今日ではカセットで記録し、自家用として保存する方法はある。然したとえば小説のように、或いは戯曲のように、誰でもがそれを望んだ時観賞の用に供する訳にはいかない。

毎日多くのテレビ局から、ドラマは洪水のように流れ出ているが、よき古典であるが故の再放送は、皆無といわないまでも極めて稀である。

あらゆる文化は継承に依って発展する。積み重ねがなければ、いつまで経っても同じ場所で足踏みである。

そこで私たちは年間のテレビドラマ優秀作品を、脚本集として残して行く方法を考え、昭和四十九

年版（四十八年度作品）として現代出版社が第一集を刊行した後をうけて、五十年から日本放送作家組合編纂で発行を続けて来た。

戯曲でもシナリオでも放送脚本でも、単行本としての出版は売れないというのが、出版界の定評である。

営利を目的の出版だったら、とうに挫折しているのだが、組合はそうではないので、どうやら赤字を出さない限界に於て継続して来た。

それに力を得て、ここに我が国テレビ発祥以来の優秀テレビドラマを、系列的に一本に集録してみた訳である。

ナマドラマから今日のビデオテープ時代まで、テレビのメカニズムの進歩と共に歩いて来たドラマの足跡を、読者はそこに見るだろう。

優秀作品を選ぶについては、芸術祭受賞作品を主軸とした。各年度の良心的な優秀作を見逃がさないためには、これが最も妥当な方法だと思われるからである。

これを以て日本のテレビが生んだ一つの時期までのドラマの、記念すべき金字塔としたい。

目次

刊行によせて

序文

追跡

どたんば

青春の深き淵より

オロロンの島

釜ヶ崎

煙の王様

父と子たち

海より深き

飛驒古系

海のおく日

さすらい

あとがき

犬丸 直 1

大林 清 2

内村 直也 7

菊島 隆三 31

大島 渚 69

松山 善三 95

岩間 芳樹 115

茂木 草介 147

生田 直親 175

井手 俊郎 201

秋元 松代 227

花登 筐 255

山内 久 285

佐々木昭一郎 337

制作 日本放送協会

追跡

作・内村直也

放送 昭和30年11月26日

演出

永山 弘

出演者

二本柳 寛
広岡三栄子
芦田 伸介
小泉 博
安部 徹
高森 和子

登場人物

〈東京〉

早川（タディエ）

マダム・花子

猪 森

三沢巡査部長

春日捜査課長

井 上

笠 原

坂口巡査

捜査課員

〈大阪〉

石田警部

山崎捜査課長

千栄子

金竜徳

岡田（タディエ）

寿司屋の亭主

〃 の妻君

浪華屋の女中

捜査課員

タイトル

M タイトル・ミュージック

1 霞のかかった東京湾

月島の遠景。

沖のほうに、大きなオランダ船が見える。

2 岩壁に沿った道

三沢 巡査部長と巡査の坂口が、靴音を響かせてパトロールしている。

三沢 「なかなか明るくならないねえ」

坂口 「明け方になったら冷えてきましたね」

三沢 「どうだい坂口。君もそろそろ、女房でも貰ったら」

坂口 「はい。……しかし飯を食わせることができるでしょうか」

三沢 「なあに、貰ってしまえばなんとかなるさ」

坂口 「そういうものですかねえ。……部長さんの所では、またお子さんができるんですってね」

三沢 「生れてしまえば、なんとかなるだろう。ハハ……」

坂口 「お目出度はいつ頃ですか」

三沢 「予定は来月の初めだが、女房の奴どうしても動き

すぎるんでね。……（この時、無灯火の自動車が道を走ってくる。車を見て）あれは、さっきの車だね。こんな時間に灯りもつけずに、うろろうしているのは訝しい」

坂口 「不審訊問をしてみましようか」

三沢 「うん」

坂口は手を挙げる。

一瞬車はスピードを出して逃げようとするが、坂口はこれを停めて、その横に立つ。

自動車のアップ。

車の中には、日の出製糖輸出課長井上、同課員笠原と回送店のおやじが乗っている。

坂口は車の中に首を突っ込んでいます。

坂口 「どうしたんです、灯りもつけないで」

回送店 「（運転台）うちのハシケがこの辺に着くはずになつてるものですから。……はい、わたしは回送店です」

坂口 「ハシケには何を積んでるんですか」

回送店 「（困って）……笠原さん！（笠原の顔をのぞく）」

坂口、笠原の方へ寄る。

笠原 「うちの会社の製品だよ」

坂口 「品物は？」

笠原 「うるさい奴だなあ。……砂糖だよ」

カメラ変ると、倉庫の壁に沿って、じっとこの様子
を見ている男（ダディエ）の影が映る。

カメラ、再びもとの車。

井上「（名刺を出して、坂口に渡す）」

坂口「日の出製糖の課長さんですね。こんな時間に、な
にかあったんですか」

井上「うちの会社の砂糖を輸出するために、五百トン、
保税倉庫から出してハシケに積んだのですがね。そ
れが行方不明になってしましましてね」

坂口は、すぐ横で話を聞いている三沢部長のほうに
振りかえる。

坂口と三沢のアップ。

坂口「（小声で）どうも話が訝しいですね」

三沢「なにか砂糖について、あるかも分らないから、僕
は水上署に連絡をとってみる。君はこの連中をもう
少し調べてみてくれ」

三沢は道を歩き出す。

坂口は訊問を続ける。

3 派出所

巡査が一人いる。

三沢が入ってきて、電話をかける。

三沢「（電話器に）……ああ、水上ですか。僕は三沢巡査

部長だが……」

4 水上警察署

宿直主任が電話器を握っている。

水上「ふん。ふんふんふん……分りました。すぐに警備
艇を出して、捜査を開始します」

5 派出所

三沢「（電話器に）では一艘はこちらに廻して下さい。

大至急たのみます」

三沢は電話を切る。巡査が警札をする。

三沢は派出所を出る。

6 もとの道

坂口が訊問を続けている。

壁に隠れて、じっとこれを聞いているダディエの影。

三沢が道をやってくる。

坂口が三沢に小声で報告をする。

三沢「……そうか。それじゃ君は本署まで連れて行って
くれ」

坂口は運転台の外に立って、車を走らせる。
自動車は道を消える。

三沢は岸壁に立って、

遠くの海を見ている。

7 海

警備艇が波を蹴って接近している。

岸壁に着く。

三沢が乗り込むと、艇は再び沖に向って走り去る。

8

警察の訊問室

春日捜査課長と井上が向い合っている（井上がロケから間に合わない場合は、背中のレストラン・イン）。

井上「実は、昨日のお昼のことなのです。うちの砂糖を五百トン、香港へ輸出する話がまとまっています、その取引先のダディエという外人がホテルに来て、いるから会ってくれというので、わたしは出かけて行ったのですが。……暫く待っていると、男が二人出てきました。ダディエさんは急用で横浜に行かれたから、横浜まで一緒に行ってくれという話なんです。……横浜のホテルに行きましたところが、ここにもいないから、熱海に行ってくれと言います。車の中では仕事の話には全然触れようとしません。一人の男は中国なまりで、もう一人は拳闘の真似ごとをしたりして、暗にわたしを恐喝します。……最後はとうとう伊東の観月楼まで連れて行かれましたね、

ここで泊ろうというのですよ。明日の朝、荷物が出るんだから、わたしはどうしても帰るといいますからね、あなたの留守中に部下の人がやってくれるだろうから、一と晩ぐらいかまわないじゃないかと、こういうんですよ」

春日「なるほど。それで井上さんはダディエという男にはお会いにならないのですね」

井上「ええ、とうとう会わずじまいですよ。……わたしは責任上、伊東なんかで遊んでいるわけにはいかなーいと思ひましてね。便所に行くふりをして、一人で東京に帰って来てしまいました、すぐに係りの者に連絡をとって調べさせると、もう倉庫から出してハシケに積んだあつたのです。そのハシケが、どうも約東の外国船に行かずに、他に行つた形跡があるというのです。これは大変だと思つて、係りの者を連れてあの岸壁へ行つてみたのです」

春日課長は、井上の話をじつと聞いている。

9 岸壁

春日「そうですね、それは大変でしたね」

道に沿つてトラックが四十台並んでいる。砂糖を積んだハシケが岸壁についている。道の横で、ダディエの影と猪森の影とが、なにか話

をしている。

ダディエの影は消える。

猪森はハシケの所に行く。

猪森「おまえたち、早くこのトラックに積むんだ」

砂糖の袋をかついだ人夫たちが、列をつくって岸に上がってくる。

警備艇がこの瞬間、沖の方から走って来て、岸壁に着く。

三沢が艇からおどり出る。

三沢「(ピストルをかまえて)おい、みんな。動いちゃいかんぞ。全部舟に乗るんだ」

この声に、人夫たちは一斉に仕事をやめる。

突然猪森がにげる。

三沢「あいつだな、こんなことをしやがったのは」

三沢、猪森を追う。

二人は画面からきれる。

警備艇の中の他の巡査が、人夫たちを舟に乗せる。

10 倉庫のたち並んだ細い道

猪森が逃げてくる。

猪森は露路に逃げこむ。

三沢が追いかけてくる。

三沢は猪森の姿を見失う。

三沢「(じだんだを踏んで)ちく生、どこへ行きやがったんだ」

三沢は、尚もこれを追おうとするが、方向がわからない。

三沢「残念だなあ」

11 東京・捜査課長室

春日課長と警部二人。
卓上の電話がなる。

春日「(電話器に)ああ、三沢部長か。(緊張して)どうした?……ハシケは完全におさえたって。それはよかった。……ふん、ふん、ふん、ふん。それで、犯人の特徴は?……ふん、レインコートを着て、赤靴をはいた男だね(卓上のメモに書きこんでいく)。……ああ、若い男で首が左に曲ってる。走っているうしろ姿しか見られなかったんだね。よろしい、ちょっと待ってくれ」

春日はメモを警部Aに渡す。

春日「月島捜査」

警部Aはメモを受けとると、部屋を出て行く。

春日「(電話器に)捜査を出した。……三沢君、ハシケのほうは水上署にたのんで、君はなるべく早くこちらに戻って来てくれ。(電話器を置く。警部Bに)現

品はおさえたが、犯人の手がかりがない。これはなかなかむづかしいケースだぞ」

警部B「相当大きな事件ですね。……日の出製糖の連中は完全にひっかけられたといっていますものね。犯人は国際的な密輸団じゃないでしょうかねえ」

春日「そうなんだ。輸出用の砂糖は税がかからない。だから、日の出製糖の製品を輸出ということにして、

保税倉庫からひき出した。それをハシケに乗せて、オランダ船に積み込んだとみせかけて、現品はうまく国内に陸あげしようという計画だったんだね。つまり、安い砂糖を売って儲けようってたくらみなんだよ」

警部B「ダディエというのが主犯じゃありませんか」

春日「会社側は、ダディエと取引をしたつもりでいるが、あの井上という課長も笠原もダディエなる人物には会っていないんだからね」

警部B「どこの国の奴でしょうかねえ」

春日「調査課のカードには全然ないというんだね」

警部B「ありません。わたしも調べました」

春日「（考えながら）ダディエ……ダディエ」

警部Cが、金竜徳の写真と書類を持って部屋に入ってくる。

警部C「（入口で）はいります。……（近よって、金竜徳

の写真・書類を春日の前に出し）取引に直接立合ったのはこの男だと、日の出製糖の二人はいいですよ。井上を伊東まで連れて行ったのも、これです。もう一人はこれの用心棒だったようです」

春日「（写真を見て）金竜徳という男だね。……（警部Bに）伊東の観月楼の連絡はまだか？」

警部B、部屋を出て行く。

警部C「金は、一昨年バナナ事件の時に一度捕まっているので、記録はしっかりしています」

春日「（書類に目を通して）いる」

警部Bが部屋に戻ってくる。

警部B「観月楼にはゆうべ泊っていません。伊東の街をいましらべさせています」

警部Bはまた部屋を出て行く。

春日「（Cに写真を返して）よし、この写しをすぐにヘリコプターで伊東へ送れ」

警部C、写真を受取って部屋を出て行く。

入れ違いに、三沢巡査部長が部屋に入ってくる。

春日「やあ、御苦労。手がかりはなにかあったかね」

三沢「トラックの運転手を一人連れてきました。それについては、砂糖を積んで大阪に運ぶように命令されています」

春日「大阪へ？」

三沢「ええ、大阪の××町（砂糖の闇市）だといっています」

春日「すると、大阪方面にも一味の奴がいるな」

春日は大阪との直通電話をかける。

春日「（電話器に）大阪を呼んでくれ。……ああ山崎君、さっき連絡をした砂糖の事件だがね。あなたの方に……」

12 大阪・捜査課長室

山崎課長が電話器を握っている。

山崎「はあ……はあ……はあ、了解。早速××町を洗ってみましょう。……なに、ダディエ？ それが主犯ですか？……勿論はつきりしている訳じゃないでしょうね。……連中は危なくなると、国外へ逃亡するにきまっているから、早いところ捕まえてしまわなければ……」

13 東京・捜査課長室

春日「そうです。早いところ捕まえてしまわなければなりませんよ。奴等は確かに日本の警察を甘く見ていますから、今度という今度は……（警部Bが部屋に入ってくる。警部Bに気がついて、電話に）ちょっと待って下さい」

警部B「伊東から連絡がありました。井上が帰ったあと、金竜徳は連れの男と大阪へ行くといっていたそうです。観月楼の女中の話です」

春日「そうか。（電話に）山崎さん、新しい情報。犯人は伊東から車であなたのほうへ逃げた模様です」

14 東京と大阪の捜査課長室

半々に画面に写し出される。

春日の話している時は東京の画面を大きく伸し、山崎の時は大阪が伸びる。

山崎は電話を聞いてメモを取る。その間に卓上の呼鈴を押す。

隣室から石田警部が入ってくる。

春日「いいえ、違います。ダディエの部下で、金竜徳という男です。写真と指紋はすぐにそちらに電送しますから」

山崎「了解。……ふんふんふん……（入ってきた課員に）ちょっとそこに待っていてくれ。……（電話に）あなたにいったんじゃないんです。どうも失礼。こちらへ逃げて来た奴は、てつて的につかまえてしまえますからね。犯人にそういっておいて下さい」

春日「（笑って）ああいっておきましよう。情報は刻々